様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　６月　７日現在

研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2006～2009
課題番号：18251008
研究課題名（和文）南北朝～隋代における石刻造像銘の調査及びその地域史的宗教環境の研究
研究課題名（英文） Research on the Buddhist stone inscriptions ; the examination of religious and historical regionalism in China, from Nanbeichao period to Sui dynasty

研究代表者
佐藤　智水（SATO CHISUI）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：40116463

研究成果の概要（和文）：
4 年間の研究期間で、中国華北各地に散在する約 60 もの仏教遺跡を捜索し、また中国・日本・欧米の美術館・博物館約 50 か所を訪れて、仏教文物に刻まれた銘文の調査を実施した。そして南北朝～隋代の多くの未報告の造像銘を収録した。収集した造像銘については『北魏石刻造像銘目録』を完成した。また、主な銘文の移録は論文等で逐次報告した。こうした現地調査の成果を基に、担当研究者は各自で仏教学・道教学・美術史・書学書道史・歴史学の観点から分析し、各地の宗教環境の背景について考察し報告した。

研究成果の概要（英文）：
In these 4 years, we searched about 60 Buddhist remains in Northern China and visited about 50 museums in Japan, USA, Canada , Europe and China. As a result, we were able to record a good few unnoticed Buddhist inscriptions from Nanbeichao period to Sui dynasty. We accomplished to make up " The list of Buddhist stone inscriptions in Beiwei dynasty " and reported some of main characters bit by bit. So we have examined the religious and historical regionalism in many parts of China, from the viewpoints of Buddhism, Taoism, calligraphy, art of Buddha image and historical science.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2007 年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2008 年度	5,700,000	1,710,000	7,410,000
2009 年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
年度			
総　計	23,300,000	6,990,000	30,290,000

研究分野：東洋史
科研費の分科・細目：人文学 B・東洋史
キーワード：仏教、南北朝時代、博物館、石刻、造像銘、道教、隋、石窟

１．研究開始当初の背景

南北朝～隋という時代は、石仏・石塔や石窟が無数に造られ、それらに刻まれた造像銘史料は飛躍的に豊富となる時代である。その

造像銘は、古くは『金石萃編』『八瓊宝金石補正』など清朝以降の金石書や地方志にもかなり収録されているが、しかしこれらは部分的移録が多く、また誤りも多い。これに対し、大村西崖『支那美術史彫塑篇』(佛書刊行会, 1915)、水野清一・永廣敏雄『龍門石窟の研究』(東方文化研究所, 1941) 同『雲崗石窟』全16巻32冊(京都大学人文科学研究所,1951～1956) などは、石窟・造像・銘文等の分析から当該時代の歴史状況を探求するすぐれた業績として利用されてきた。また、松原三郎の一連の著書『中国仏教彫刻史研究』(吉川公文館, 1961)・『埋もれた中国石仏の研究』(東京美術, 1985)・『中国仏教彫刻史論』全４冊(吉川公文館, 1995) は、仏教造像史研究に銘文解析を含み込んだ注目すべき業績である。これら先人の業績をうけて著した拙稿「北朝造像銘考」(「史学雑誌」86-10, 1977。修訂版を『北魏仏教史論考』岡山大学文学部研究論叢 15, 1998 に所収) は、造像銘を体系的に整理分析して歴史史料として扱う視座を提起した。この視座を受けて、北京社会科学院の候旭東『五・六世紀北方民族佛教信仰』(中国社会科学出版社,2000)、Stanley Abe “Ordinary Images ”the Univ. of Chicago Press.,Chicago and London, 2002、石松日奈子『北魏仏教造像史の研究』(ブリュッケ, 2005) など、仏教造像やそこに刻まれている造像銘を研究対象とする意欲的試みが出始めている。ただ、それを生み出した歴史的宗教環境については、まだ緒に就いたばかりであった。一方、造像銘史料の紹介は『龍門石窟碑刻題記彙録』(中国大百科全書出版社, 1998) や『北魏紀年佛教石刻拓本目録』(中央研究院歴史語言研究所, 2002) など、これまで未整理だったものが新たに整理されたり、未調査の遺跡や新しく出土する史料も多く、それらの整理は焦眉の課題といえる。

２．研究の目的

南北朝～隋代という時代は、石仏・石塔や石窟が無数に造られ (隋の法琳『弁正論』によれば隋後期までに百五十万体以上という)、それらに刻まれた造像銘史料は飛躍的に豊富となる時代である。しかも、その担い手は上は皇帝・上層貴族から下は庶人階層まで、男女を問わず、漢族・胡族をも含む広汎な人々であった。造像銘はそれに関わった人々の信仰や思惑、それに造像技術上の制約に基づく、という点で一面的性格の史料であるが、文献と石刻史料との乖離を注意深く読みとれば、地域状況と密接にかかわる人間関係・ネットワーク・情報の流れ・地域社会の秩序構造・価値意識・生活・信仰などそれぞれの地域に潜む人間像・社会像・時代像を模索することが可能である。本研究の目的は、未紹介や新出土の史料を探索して整理し、特に地域とのかかわりに重点をおいて観察し、造像供養という奉仏行事を生み出すまでに醸成された各地域の歴史的宗教的社会環境を探求することにある。

３．研究の方法

本調査・研究は、時期的には北魏王朝成立の５世紀初頭から隋王朝末の６世紀前半までの時代、地域的には現在の河北省・河南省・山東省・安徽省・山西省・陝西省・甘粛省・四川省に分布する仏教や道教の造像銘を収集し、その史料をもとに上記の課題に取り組むものである。

(1) 現地調査を実施して造像銘を探索する

対象物の調査については次のような基本作業を行なう。

①出土地・所蔵機関の確認　②環境や形状の観察と計測　③写真撮影（或はスケッチ）④拓本収集　⑤銘文の移録

(2) 調査した史料を整理して、文献資料と照合しながら「造像銘目録」及び「銘文録」を作成する。

(3) 採取した史料をもとに歴史学・仏教学・道教学・美術史・書道史など多角的視点から分析し、それらを生み出した各地方独自の地域史的宗教環境を考察する。

４．研究成果

(1)現地調査

中国及び日本や欧米の美術館・博物館・文物保管所・寺院等に所蔵されている当該時代仏教文物の調査を実施した。

中国については、山西省（北部１回、中部１回、中南部３回)、陝西省（西部１回、渭北地区１回)、甘粛省（麥積山１回、隴東地区１回)、河北省(中南部２回)、安徽省１回、河南省２回、山東省１回、台湾台北市１回、実施した。特に、甘粛省では蘭州大学の杜斗城教授、西安では趙力光碑林博物館長、李雪芳先生、河北省では河北省博物館の劉建華先生、河南省では河南省博物院の王景荃先生に貴重な指導と資料提供を得た。ただ四川省については、予定年に大地震が起こり調査を断念せざるを得なかった。 欧米については、合衆国～カナダ１回、ヨーロッパ１回、実施した。とくに、合衆国ではデューク大学のＳ．ＡＢＥ教授に多大の協力を得た。

また、特に中国では大小の石窟や摩崖に刻まれた造像碑文の計測、写真撮影、スケッチ、銘文移録を行なった。中でも、盂県の千仏山石窟、平定県の開河寺石窟、晋城市澤州県碧落寺石窟、沁水県柳木岩摩崖、太谷県塔寺石窟、郷寧県千仏洞等では貴重な北朝造像銘や碑文を見いだした。黎城県・沁県・沁水県・陽城県・霊石県の博物館でも、未報告の造像銘に遭遇した。また、甘粛省東部の隴東地区博物館所蔵の造像はおおむね小ぶりの像が

多く、他の地域とは異なった雰囲気を有していて、河西～蘭州～西安ルートとは異質の仏教造像の伝統を感じた。寧県博物館では、北魏史料の一級品ともいえる「山公寺碑」なる新出土の碑像銘文（下部欠損）を記録した。

(2)「造像銘目録」及び「銘文録」の作成

「造像銘目録」については、完全あるいは不完全な記録に基づく従来の造像銘に新たに収集した銘文を加える作業を重ねて、龍門石窟を除く「北魏造像銘目録（初稿）」を完成した。「東魏西魏造像銘目録（初稿）」「北斉北周造像銘目録（初稿）」及び「隋開皇年造像銘目録（初稿）」は校正段階にある。目録作成においては、当該造像と関係する地名・省名を考察のうえ付記した。

「銘文録」については、研究期間中にも逐次報告してきた。例えば、研究代表者の佐藤智水「中国における初期の『邑義』について（中）銘文編 1―北魏孝文帝・宣武帝期―」（『仏教文化研究所紀要』46 号）においては、集団による造像銘をまとめて紹介しており、また「山西省塔寺石窟北壁の北魏造像と銘文」（『龍谷史壇』130 号）ほか後述の論考でも、未紹介の銘文を考察を加えた上で紹介している。また、近年河北省黄驊市近郊で出土した数十点の白玉造像の銘文について、河北省博物館劉建華先生の協力を得てその整理状況を報告書に掲載する。

(3)歴史学・仏教学・道教学・美術史・書道史など多角的視点からの分析と地域史的宗教環境の考察

佐藤智水（研究代表者）は、中国仏教史学・金石学の視覚から、収集した造像銘史料を整理する傍ら、特に華北に散在する５世紀末・６世紀初頭の比較的大規模な造像供養とその地域性について考察を試みた。考察の結果、現在河南省～山西省～河北省に残る大型の碑像や石像及び小石窟や摩崖像等は、像の形相や石質・文字などに地域によって違いがあるものの、その他の小豪族とみなされる有力一族が造像主であり、彼らが造像供養という奉仏事業を完遂することによって、仏の偉大なる功徳が一族の繁栄をもたらし、且つ北魏皇帝・国家の繁栄と安寧を永遠ならしめ、引いては仏法の興隆を揺るぎないものにする、という共通の祈願を有していることを見いだした。そしてその背景には、当時のいわゆる「貴族性社会」という身分が巧妙に峻別された社会にあって、上流名族層から抑圧されていた小豪族が、社会的経済的実力を蓄えてきた自らの勢威を、北魏王朝に認知させたいという意図が隠されていることを指摘した。

即ち、北魏建国以降半世紀以上の間、山東五姓などの漢人名族層が北魏王朝との間に距離をおいていたのに対し、４３９年の北魏の華北統一以降、大規模な対外戦争後の比較的安定した政治運営が行なわれていたこの時期に、各地で台頭してきた小豪族は奉仏事業を通して、教線の拡大を目指していた仏教教団を介して北魏皇帝にアピールした。そこには一族の地位や社会的評価を上昇させたいという小豪族の宿願が込められていた。異民族王朝の下で上層階級の強固な壁を突き破ろうとするこうした漢族中間層の台頭は、仏教信仰と奉仏供養を通じて、北魏皇帝と中間層を結びつけることになり、北魏王朝としても歓迎すべきこととして、民爵や板官授与などしばしば彼らへの配慮が行なわれた。孝文帝の改革、とりわけ「姓族分定」政策も以上の流れの中で行なわれ、勃興する中間層を抑圧して一線を画したい名族層をも比較的容易に北魏王朝へ参画させることに成功したと言える。

これらの見通しと具体例は現地調査を重ねる過程で見えてきたもので、研究代表者（佐藤）の以下の一連の論稿で考察した。

「華北石刻史料の調査　―河南省汲郡の尚氏―」（『唐代史研究』7 号、2004）

「北魏太和末年の大型石仏像」（『龍谷大学論集』466 号、2005）

「中国における初期の『邑義』について（上）」（『仏教文化研究所紀要』45 集、2006）

「河北省涿県の北魏造像と邑義」（『佛教史研究』43 号、2007）

「山西省塔寺石窟北壁の北魏造像と銘文」（『龍谷史壇』130 号、2010）

都築晶子（研究分担者）は、中国史学・道教学の視覚から調査・研究に従事した。特に興味を注いだのは山西省で最も早く道教造像が出現する芮城県で、道教像出現の前提となる地域史的宗教環境、とりわけ斎堂や道観及び教団組織の問題に関心を寄せたが、圧倒的な史料不足の状態にあり、今後の課題として引き継ぐことになった。報告では、沁県南涅水で多量に出土した重層型石塔と甘粛省東部で出土する同形式の石塔との関連から、甘粛省東部と山西省中南部の間に仏教信仰を有する住民の移動など密接な関連があることを考察した。

長谷川岳史（研究分担者）は、仏教学・中国仏典研究の視覚から調査・研究に従事した。現地調査においては、銘文中の不確かな仏教用語や刻経の欠損文字の策定について大いに貢献された。報告書においては、６世紀の河北省中南部から山東省にかけて特徴的に現れる刻経事業について観察し、特に八会寺の塔柱の外壁に刻まれた経典の調査について紹介しながら、それらの経典が６世紀に流布する教学上の背景について言及した。

宮崎洋一（研究分担者）は、書学・書道史の視覚から調査・研究に従事した。特に、文字観察と真偽判断の見解は、録文移録の現場で大いに力を発揮した。報告書では造像銘の文字の特徴を、刻された像との位置関係、文字の大きさや雰囲気などから改めて見直し、特に碑においては、像とともに刻された題記や供養者名に、記録と顕示の両方の意識が現れていることを抽出した。また、太原の山西博物院所蔵の王黄羅等造像碑（無記年。伝高平市将来）の供養者の文字を分析し、それが山西省東南部の高平市資積寺門前に置かれている太和２０年銘四面造像碑の文字と共通性が見られることを比較検討し、両者が高平市一帯の文字の雰囲気を伝えていることを考察した。

佐川英治（研究分担者）は、中国古代政治史・制度史の視覚から調査・研究に従事した。特に、北魏の都「平城」と「洛陽」の都城としての風景や歴史的機能を空間設計から考察すると共に、報告書では洛陽をとりまく小規模の仏教石窟の位置とその銘文を紹介し、加えてこれら小石窟の性格を都城との関係に留意しつつ分析した。

市川良文（研究分担者）は、インド～中央アジア仏教史の視覚から調査・研究に従事した。現地調査で北朝期の造像銘を読み込み移録する作業の経験から、インドの仏教碑銘との類似性を感知し、報告書ではインドにおける仏教寄進銘にみられる定型表現と中国北朝期造像銘の定型句表現との比較検討を試みた。その結果、中国北朝期の定型句表現はインドの４世紀以前の仏教寄進銘、西北インド及びその周辺地域の寄進銘との共通性が濃厚であって、時代の近い４～６世紀の寄進銘とは共通性が希薄であることを見出し、当時の東西交流のあり方にも言及した。

石松日奈子（連携研究者）は、本研究グループの造像銘研究の成果を生かしながら、仏教造像の時代的変化や地域的特性を、像の形相や装飾、供養者レリーフ等に視点を置いて考察する仏教美術史、中国仏教造像史の視覚から調査・研究に従事した。氏の考察は、雲岡石窟造像（山西省北部）、耀県薬王山碑林造像（陝西省南部）、敦煌莫高窟供養者像（甘粛省西部）、隴東地区早期造像（甘粛省東部）ほか、現地調査は河北省・河南省・安徽省など各地に及び、刺激的な観点を提供した。報告書では、陝西地区における初期道教図像の展開について考察し、都市部の長安では仏教像を参考として“仏像のような”老君像が製作され、田舎の陝北地区では中国の在来神をイメージした老君像が生み出されたこと、そして北魏末の５２０年前後に老君のイメージが「老練の賢者」「智をそなえた士大夫」へと向かい、より人間的な老君像が形成されていった、と解析した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 25 件）

① 石松日奈子（連携研究者）
「敦煌莫高窟第二八五窟北壁の供養者像と供養者題記」（査読有）、『龍谷史壇』１３１号、2010 年 3 月、pp.43～87

② 佐川英治（研究分担者）
「『奢靡』と『狂直』―洛陽建設をめぐる魏の明帝と高堂隆―」（査読無）『中国文史論叢』６号、2010 年 3 月、pp.1～34

③ 佐藤智水（研究代表者）
「山西省塔寺石窟北壁の北魏造像と銘文」（査読有）、『龍谷史壇』１３０号、2010 年 2 月、pp.1～37

④ 石松日奈子（連携研究者）
「中国隴東地区早期仏教造像の特質と来源」（査読有）、『美学美術史学』２４号、2010 年、pp.17～33

⑤ 宮崎洋一（研究分担者）
「顔真卿撰『天台智者大師画讃』について」（査読無）、『日本のことばと文化―日本と中国の日本文化研究の接点―』（横山邦治先生叙勲ならびに喜寿記念論文集）2009 年 10 月、pp.621～634

⑥ 佐川英治（研究分担者）
「北魏洛陽城的中軸線及其空間設計試論」（査読有）、『魏晋南北朝史研究：回顧与探索』52 巻、湖北教育出版社 2009 年 8 月、pp.91～106

⑦ 石松日奈子（連携研究者）
「中国仏教造像人中的供養人像」（査読有）、『中原文物』2009 年 5 期、pp.74～85

⑧ 石松日奈子（連携研究者）
「耀県薬王山博物館魏文朗造像碑的製年代」（査読無）、『道教美術新論』【第一届道教美術史国際研討会論文集：山東美術出版社】2008 年 11 月、pp.79～88

⑨ 石松日奈子（連携研究者）
「中国古代石彫論　―石獣・石人・石仏―」（査読有）、『國華』１３５２号、2008 年 6 月、pp.5～19

⑩ 長谷川岳史（研究分担者）
「隋代仏教における『観無量寿経』理解―慧遠の「五要」を中心として」（査読有）、『仏教学研究』６４号、2008 年 3 月、pp.1～20

⑪ 長谷川岳史（研究分担者）
「隋代仏教における三身解釈の諸相」（査読有）、『龍谷大学論集』４７１号、2008 年 1 月、pp.62～81

⑫ 佐藤智水（研究代表者）
「中国における初期の『邑義』について（中）」（査読無）、『仏教文化研究所紀要』４６号、2007 年 12 月、pp.181～237

⑬ 都築晶子（研究分担者）
「大谷文書中の漢語資料の研究」（査読無）、『仏教文化研究所紀要』４６号、2007 年 12 月、pp.1～118

⑭ 佐藤智水（研究代表者）
「河北省涿県の北魏造像と邑義（前篇）」（査読有）、『仏教史研究』４３号、2007 年 10 月、pp.1～47

⑮ 宮崎洋一（研究分担者）
「王羲之の故宅や祠廟について　―顔魯公祠との比較を兼ねて―」（査読無）、『第 5 回書法文化書法教育国際会議論文選』2007 年 10 月、pp.409～425

⑯ 市川良文（研究分担者）
「カロシュティー文字資料について」（査読無）、『日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』第３巻、2007 年 10 月、pp.187～190

⑰ 都築晶子（研究分担者）
「霊宝経における宗教空間　―斎堂・戒・威儀―」（査読無）、科学研究費【基盤(B)】研究成果報告書『江南道教の研究』（研究代表者：麥谷邦夫）2007 年 3 月、pp.1～22

⑱ 佐川英治（研究分担者）
「遊牧と農耕の間　―北魏平城における鹿苑の機能とその変遷―」（査読無）、『岡山大学文学部紀要』４７号、2007 年、pp.137～164

⑲ 佐藤智水（研究代表者）
「中国における初期の『邑義』について（上）」（査読無）、『仏教文化研究所紀要』４５号、2006 年 11 月、pp.77～113

⑳ 石松日奈子（連携研究者）
「雲岡第 11 窟大和七年邑義造像和武州山石窟寺的変化」（査読無）、『2005 年雲岡国際学術研討会論文集：研究巻』2006 年、pp.301～308

〔学会発表〕（計４件）
① 市川良文
「インド仏教碑銘の再検討－縁起法頌の理解をめぐっての一試論－」
『第 5 回ガンダーラ仏教美術研究会』2009 年 2 月 26 日、（会場）龍谷大学

② 佐藤智水
「中国における造像供養の背景について－北朝造像銘をてがかりに－」
『第 4 回ガンダーラ仏教美術研究会』2008 年 12 月 7 日、（会場）龍谷大学

③ 市川良文
「シルクロード（ニヤ）の木簡」
学会『簡牘の世界　―越後・列島・半島・大陸を結ぶ―』2008 年 3 月 2 日、（会場）新潟大学

④ 石松日奈子
「耀県薬王山博物館　魏文朗造像碑の制作年代」
学会『中国首届道教美術史国際研討会』2007 年 5 月 11 日、（会場）中国西安市西安美術学院

６．研究組織
(1)研究代表者
佐藤　智水（SATO CHISUI）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：40116463

(2)研究分担者
都築　晶子（TSUZUKI AKIKO）
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：00115601

長谷川　岳史（HASEGAWA TAKESHI）
龍谷大学・文学部・准教授
研究者番号：00309105

宮崎　洋一（MIYAZAKI YOICHI）
広島文教女子大学・人間科学部・教授
研究者番号：50258290

佐川　英治（SAGAWA EIJI）
岡山大学・社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：00343286

市川　良文（ICHIKAWA YOSHIHUMI）
龍谷大学・文学部・講師
研究者番号：70440881

(3)連携研究者

石松　日奈子（ISHIMATSU HINAKO）
聖泉女子大学・文学部・講師
研究者番号：80424307